活人形

豊島与志雄

一

むかし、インドに、ターコール僧正というえらいお坊さまがいました。むずかしい病気をなおしたり鬼をおいはらったり、ときには、死人をよみがえらしたりするほど、ふしぎな力をそなえていられるという評ばんでした。そしてたいへん慈悲深くて、なんでも貧乏な人たちにめぐんでやり、自分は、弟子の若いお坊さんと二人きりで、大きな、ぼだい樹のそばの小さな家に、つつましく暮していました。

そのターコール僧正が、ある日、庭のぼだい樹のこ

かげのベンチに腰をおろして、休んでいますと、みすぼらしいなりをした、年とった男がたずねてきました。悲しそうなおどおどしたようすで、僧正様にお祈りをしていただきたいと申すんです。

「お祈りはわたしの仕事だ。してあげましょう」とターコール僧正は答えました。

男はしばらくもじもじしていましたが、顔をふせていました。

「お礼のお金をもっておりませんが、ただでお祈りをしてくださいましょうか」

「お祈りはわたしの仕事だ。お金がなくてもしてあげ

ましょう」を僧正は答えました。

男はしばらくして、またいいました。

「ここではございません。わたくしどもの宿までできてお祈りをしてくださいましょうか」

「お祈りはわたしの仕事だ。行ってあげましょう」と僧正は答えました。

男はしばらくしてまたいいました。

「わたくしのためにではございません。人間のためにではございません。こわれかけた大きな人形が一つございます。そのためにお祈りをしてくださいましょうか」

「お祈(いの)りはわたしの仕事(しごと)だ。その人形のためにしてあげましょう」と僧正(そうじょう)は答(こた)えました。

男はうれしそうに、眼(め)をかがやかして、僧正(そうじょう)の顔(かお)をながめていいました。

「ほんとうでございますか」

「お祈(いの)りはわたしの仕事(しごと)だ」と僧正(そうじょう)はほほえんで答(こた)えました。「一文(もん)もお金をもらわないでも、あなたの宿(やど)まで行って、そのこわれかけた人形のために、お祈(いの)りをしてあげましょう」

二

大きなぼだい樹のあるターコール僧正の家から、一里ばかりはなれた町のはずれに、きたない宿屋がありました。見すぼらしい年とった男は、そこへ僧正を案内してきました。そしてみちみち、僧正へ自分の身の上を話しました。

彼はコスモといって、女房のコスマと二人で、諸国をへめぐっている人形使でした。天気のよい日町や村の広場に人をあつめて、コスモが人形を踊らせ、コスマがマンドリンをひいて、いくらかのお金をもらい、そして方々旅をしてあるいているのでした。ところが、

そういう生活は時がたつにつれて、はじめほど面白いものではなくなってきました。天気は毎日晴れるものではありませんし、お金はいつももらえるとはきまりません。それに方々の土地も見つくしてしまいました。だんだん年もとってきました。人形もこわれかけました。いっそ故郷へ帰って、そこで百姓をしてる息子のところで、残った生がいを送ろう、とそう二人は相談しました。

ちょうどそのとき、この土地にたいへんえらい坊さまがいられるということを聞いて、二人は、今まで自分たちを養ってくれた人形のため、その坊さまにお

祈(いの)りをしていただいて、そして故郷(こきょう)へ帰(かえ)ろうと思ったのでした。

そういう話を、ターコール僧正(そうじょう)はにこにこしながら聞(き)いていました。

宿屋(やどや)について、奥(おく)のせまい室(へや)にはいっていきますと、コスマはぼんやり考えこんでいました。

「僧正(そうじょう)さまがいらしたよ」とコスモは大きな声でいいました。

コスマはびっくりして飛(と)びあがるようにたってきて、ターコール僧正(そうじょう)を迎(むか)えました。

僧正(そうじょう)はあまりよけいな口をききませんでした。そ

してすぐに尋ねました。

「人形は？」

「はい、これでございます」

コスモとコスマは、室のすみの釘にさがってる人形のおおいを取りました。赤と黄と緑と青と紫との五色のしまのはいった着物をつけ、三角の金色の帽子をかぶり、緋色の毛靴をはいて、ぶらりとさがっていました。その帽子や着物や靴はもとより、顔や手先まで、うすぐろくよごれていて、長年のあいだ旅をしてあるいたようすが見えています。

僧正はそれをじっとながめました。

「お祈りをしてあげましょう」
僧正は紫の衣をきました。人形の前に香をたき、ろうそくの火をともしました。そしてじゅずをつまぐりながら、祈りをはじめました。窓からさしてくるぼーっとした明るみのなかに、香の煙がもつれ、ろうそくの火がちらついて、僧正の祈りの声はだんだん高まってきました。

人形が、びくりと動いたようでした。はげかかってうすよごれのしてるその顔に、ろうそくの光がうつって、ほんのり赤みがさしてきます。眼が大きくなります。今にも口をききそうです。その口元にはもう、や

さしい笑(え)みをうかべています……。僧正(そうじょう)の祈(いの)りの声は高く低くつづきます。

コスモとコスマは、びっくりしたような気持(きもち)で、人形の顔(かお)に見入っていました。もう眼(め)をそらすことができないで、いっしんに見入っていました。僧正(そうじょう)の祈(いの)りの声と、ろうそくの光(ひかり)と香(こう)の煙(けむり)のなかで、人形がうっとり笑いかけたとき、コスモとコスマの眼(め)からは、涙(なみだ)がはらはらと流(なが)れました。そして涙(なみだ)を流(なが)しながら二人は、人形の顔(かお)を見つめていました。

三

ターコール僧正のお祈りで生きあがった人形……活人形……。

そういううわさで、町はわきかえるようなさわぎでした。そしてその活人形の踊りを見ようとおもって、町の人はもとより、近在の人まで、美しく着かざって、町のにぎやかな広場に集ってきました。

見物人たちが美しく着かざってるのにくらべて、人形使の方はひどく粗末ななりでした。コスモはなんのかざりもない色のあせた黒い服をつけ、まんなかにすりきれたふさのついてる大黒帽をかぶり、木靴を

はいていました。コスマは、赤茶(あかちゃ)けた服(ふく)をつけて、古いマンドリンをかかえていました。そして広場の中には、うすいむしろがしいてあるきりでした。

　けれども、コスマもコスマもいっしょうけんめいでした。その日にやけた年とった顔(かお)には、いつにない若々(わかわか)しい元気がうかんでいました。彼(かれ)は額(ひたい)に汗(あせ)をにじましながら、つよい調子(ちょうし)でいいました。

「わたくしは、もう人形使(にんぎょうつかい)をやめまして、故郷(こきょう)に帰(かえ)るつもりでおりました。この人形も、もう人様(ひとさま)にお目にかけないつもりでおりました。ところが、ターコール僧正(そうじょう)さまのことをききまして、わたくしどもを長

いあいだ養(やしな)ってくれましたこの人形のために、一度(ど)お祈(いの)りをしていただきたいと考えました。そして僧正(そうじょう)さまにお願(ねが)いいたしました。僧正(そうじょう)さまはすぐに承知(しょうち)してくださいました。わたくしどもの宿(やど)まできてくださいまして、人形のためにお祈(いの)りをしてくださいました。そのお祈(いの)りのさいちゅうに、この人形はいきいきとした顔(かお)になって、わたくしどもに笑(わら)いかけました。わたくしは、わたくしどもは、それをはっきり見ました。ほんとうに笑(わら)いかけました。生きあがりました。わたくしどもは、ただうれし泣(な)きに泣(な)きました。

……そして、人様(ひとさま)のおすすめによりまして、この人形

を、ターコール僧正さまのお祈りで生きあがったこの人形を、さいごに一度だけ、みな様にお目にかけることにいたしました……」

それは、いつも人を呼びあつめるこっけいな道化たあいさつとは、まるっきりちがった調子でした。見物人たちはへんな気がしました。そして、コスモが人形をそこへもちだしたのを見ますと、ふしぎでした。古いはげかかった人形の顔が、なるほど、いきいきとしていて、笑ってるようです……。

その人形の踊りが、またすばらしいものでした。年とったやせたコスモの手であやつられてるとは、どう

しても思えませんでした。眼をみひらき、はれやかに笑いながら、だんだんはげしく、しまいにはまるで気でもちがったように、踊りまわりました。日の光に、金色の三角帽がきらきらとかがやき、五色の着物がに、、じのようにかがやきました。どう見ても、生きた人形が自分で踊ってるのでして、コスモはただそれについてまわってるだけでした。マンドリンをひいてるコスマも、人形を踊らせるためにひいてるのではなく、人形からむりにひかせられてるようでした。

　見物人たちは、人形の踊りに見とれて、夢をみてるような気持になり、声をたてるものもなくただうっと

りとしていました。コスモもコスマもむちゅうでした。もう息もつけませんでした。そしてとうとう、踊りのさいちゅうに、コスモは力がつきてぱったり倒れてしまいました。同時に、コスマのマンドリンも、ぷつりと糸が切れました。

人形だけが、はれやかに笑いながら、ひとりで立っていました。

四

コスモとコスマとは、人形を大事にかかえて、故郷

へ帰(かえ)っていきました。たくさんもらったお金を、半分ばかり、ターコール僧正(そうじょう)へおくりました。

ターコール僧正(そうじょう)は、お金をたくさんもらっても一文(もん)も、もらわなかったときと同じように、別(べつ)にふしぎがりもしませんでした。そしてそのお金をみんな、貧乏(びんぼう)な人たちにめぐんでやりました。それから、二人の人形使(にんぎょうつかい)のためにお祈(いの)りをしてやりました。

ターコール僧正(そうじょう)がお祈(いの)りをしてるとき、コスモとコスマとは、故郷(こきょう)への旅(たび)をいそいでいました。コスモはいいました。

「ありがたい僧正(そうじょう)さまだ」

「ほんとにありがたい僧正(そうじょう)さまです」とコスマは答(こた)えました。コスモはしばらくしてまたいいました。

「この人形は、わたしたちのためには、大事(だいじ)な人形だ」

「ほんとに大事(だいじ)な人形です」とコスマは答(こた)えました。

そして二人は、うち晴(は)れた日の光をあおいで故郷(こきょう)への旅(たび)をいそぎました。

底本：「天狗笑い」晶文社
１９７８（昭和53）年４月15日発行
入力：田中敬三
校正：川山隆
２００６年12月31日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。